

3 2018年度 奨励賞受賞論文

公民科「現代社会」において社会認識の深化を目指した NIE の実践

36 期 授業実践開発コース 小川雄太（兵庫県）

本研究では、公民科「現代社会」において、社会認識の深化を企図した NIE ワークシートを作成し、その効果について実践的な検討を行った。その結果、第一に、本実践により、公民科「現代社会」への好感度が高まり、有用感が促進されたことが示唆されるとともに、世の中のニュース・出来事への関心度、理解度、関係認識性が促進されたことが示唆された。第二に、NIE の取り組みに対して、生徒は肯定的な意見を持ち、世の中のニュースに対する知的好奇心や積極性が促進されたことが示唆された。第三に、生徒は「事実把握」、「関連思考」、「価値判断」の各段階での学習により社会認識の深化が図られたことが示唆され、「自己表現」の段階で、教室全体の学びとなり、協働的な学びが実現したことが推察される。

以上の結果から、NIE 実践により、生徒は、学習意欲の向上が見られるとともに、世の中で起こる出来事的重要性を認識できたといえる。

I 問題と目的

新しい学習指導要領では、公民科における必修科目「公共」が新設され、選択・判断するための手掛かりとなる考え方や公共的な空間における基本的原理を活用して、現代の社会的事象や現実社会の諸課題について、事実を基に協働的に考察し、合意形成や社会参画を視野に入れながら解決に向けて構想したことの妥当性や効果、実現可能性などを指標にして論拠を基に議論する力を養うことが掲げられている（中央教育審議会、2016）。

また、公職選挙法の改正によって、選挙権年齢が「18 歳以上」に引き下げられたことは、特に公民科に関わることとして捉えられ、主権者教育が強調されるようになってきている。この公職選挙法の改正によって、早くて在学中に、遅くとも高校卒業時に、誰もが選挙権年齢に達することとなる。

これらのことから、高校の段階において、社会認識の深化を図ることがより一層求められているといえる。また、高校の公民科での学習は、その後の社会認識の獲得にも大きく影響を与え続けるものであると考えられる。

社会認識とは「学習者が社会科教育の成果として獲得した知識と知識を獲得する過程を指す」（中妻、2014, pp. 12-13）ものとされる。そして、社会系教科の目標は、社会認識を通して公民的資質を育成す

ることである。社会認識の深化は、公民的資質育成の基礎となるものであり、大町(2001)、水谷(2010)らが、社会認識の深化が公民的資質の育成に繋がることを指摘している。

一方で、小原(2011)は、NIE（「教育に新聞を」：Newspaper in Education）の意義の一つとして、公民的資質育成の実現に関わることを指摘しており、公民的資質育成のために、NIE が一つの有効な方策であると考えられる。

また、影山(2007)は、新聞を公論・公共的空間を担う、信頼度の高いメディアであることを指摘した上で、公民的資質育成のためには市民社会の意見（公論）と接する機会を豊かにしなければならないと述べ、NIE の意義を強調している。

さらに、『高等学校学習指導要領解説公民科編』は、各科目の指導にあたって、「情報を主体的に活用する学習活動を重視する」（文部科学省、2010, p. 59）ことを掲げており、その中で新聞の活用を推奨している。そして、「現代社会」の内容の取扱いにおいては、「的確な資料に基づいて、社会的事象に対する客観的かつ公正なものの見方や考え方を育成するとともに、学び方の習得を図ること」（文部科学省、2010, p. 21）としていることから、学習指導要領においても NIE の推進が求められているといえる。

これらのことを受けて、NIE に関するさまざまな

先行研究が行われている。野中（2006）は、高校生と大学生を対象に質問紙調査を実施し、新聞の意見形成効果を明らかにした。そして、特定のメディアによる新聞記事だけをNIEに利用することで、教育の名において、偏った見方を助長する可能性のあることを指摘しており、NIE実践にあたっては、この点に注意を払う必要がある。

また、山根（2015）は、NIEを明確な意図を持って学習に位置づけることで、情報読解力の育成に効果的であることを指摘している。さらに、中日新聞社NIE事務局（2008）は、NIEによる社会認識の深化について、知ることによる「事実把握」、読み解くことによる「関連思考」、考えることによる「価値判断」、発信することによる「自己表現」を提示している。そして、中嶋（2009）は、中日新聞社NIE事務局の提示するNIEによる社会認識の深化を踏まえて、新聞切り抜き作品を分析した結果、NIEを通して、「事実認識」、「関連認識」、「価値認識」の三つの過程を経て、社会認識が形成されることを明らかにしている。

このように、小学校及び中学校の社会科におけるNIE実践は多く確認できた。しかしながら、高校の公民科での実践は、鍛冶（2015）、杉原（2011）、松井（2011）等少数が確認できたのみであり、社会認識の深化に主眼を置いたものは、管見の限り確認できなかった。

以上のことから、本研究では、公民科「現代社会」において、社会認識の深化を企図したNIEワークシートを作成し、その効果を実践的に検討することとする。具体的には、生徒一人ひとりが、中日新聞社NIE事務局の提示する「事実把握」、「関連思考」、「価値判断」、「自己表現」に取り組むことで、社会認識の深化を目指す。

II 方法

1 実践対象および時期

H県内の公立高校の専門学科（福祉科）3学年31名（男子2名、女子29名）を対象とした。2017年6月から2018年1月に実践を行った。

2 NIE学習モデルの設計

中日新聞社NIE事務局の提示するNIEによる社会

認識の深化を参考にして、高校生が取り組むことのできる学習モデルを設計した。

第一に、「事実把握」として、新聞記事の要約を行うこととした。ここでは、新聞記事に書かれている事実を正しく読み取らせることを目指した。第二に、「関連思考」として、新聞記事に書かれている事実と既習事項との関わりを検討することとした。ここでは、自分たちの日常生活や教科書での学習内容との関連を捉えさせることを目指した。第三に、「価値判断」として、「事実把握」と「関連思考」を踏まえて、自分の主張を考えさせることとした。第四に、「自己表現」として、「事実把握」「関連思考」「価値判断」の一連の学習成果を発表し、クラス全体での意見交流を行わせることとした。

次に、NIE学習モデルに基づいて、NIEワークシートを作成した（図1）。生徒には、NIEワークシートを完成させることで、「事実把握」「関連思考」「価値判断」「自己表現」を辿って、社会認識の深化を図ることができるようにしている。

3 実践の概要

実践は、公民科「現代社会」において行った。授業時間のうち、はじめの10分間を各自の取り組んだNIEワークシートの発表時間と位置づけ、2017年6月から2018年1月までのおよそ半年間にわたって継続的に行った。

生徒による発表を開始する前の授業において、ガイダンスを行った。実際に授業者が作成したNIEワークシートを提示して、どのように学習を進めていくのかについての説明を行った。

生徒には、家庭学習として、NIEワークシートを使って、新聞の分析を行うことを課し、その後、一人ずつ授業のはじめの10分間に発表させた。発表を行う10分間が終わった後は、通常の授業を行った。発表は、その日の順番にあっている生徒が自分の取り組んだNIEワークシートに沿う形で行った。生徒の発表では、「事実把握」として、新聞に書かれている内容を正確に読み取り、まとめることができていた。

また、「関連思考」として、生徒は新聞に書かれている内容を日常生活等の自分の身近なことに関連づけて考えることができていた。例えば、後部座席

現代社会を探る
3年3組 () 番 名前 ()

タイトル(見出し)
耐性菌漂う「聖なる大河」

出典(新聞を原則とする)
(産経) 新聞 (朝刊・夕刊・その他)
・ホームページ上のニュース (Yahoo!ニュース) 掲載元 (時事通信)
・その他(具体的に) ()

掲載日
平成 (29) 年 (5) 月 (6) 日 (土) 曜日

1 要約(事実把握)
インドのガンジス川周辺では、下痢や発熱、皮膚病、吐き気などを訴える人が増えている。その原因は、耐性菌と呼ばれる薬(抗生物質)に抵抗力を持った細菌である。耐性菌は主に人間の体内で生成されると考えられる。インドの薬局では医師の処方箋なしで薬(抗生物質)を売っており、患者は不必要に薬(抗生物質)を服用し、しかも中途半端に服用をやめている。そのため、体内で耐性菌が増えていると考えられる。そして、汚水処理システムの能力を超える汚物が川に流れ込むことによって、ガンジス川で耐性菌が増え、健康被害を訴える人がガンジス川周辺で増加しているのである。耐性菌は薬(抗生物質)が効かないため、人類の脅威となりつつある。

2 日常生活や学習内容との関連(関連思考)
(水質汚濁を中心に)
このニュースは日本の公害と似ていると思う。日本では高度経済成長期を中心に公害病が発生した。その一つである水俣病やイタイイタイ病は、水質汚濁が原因である。有害物質を含む工場からの排水が海や川に流れ込むことによって引き起こされ、多くの被害が発生した。
(環境問題をを中心に)
このニュースを環境問題として考えたいと思う。大気汚染や水質汚濁という問題は、一国だけにとどまらず、多くの国に關係する問題である。大気汚染の例としてPM2.5があげられる。これは、中国で発生した物質であるが、日本にも影響を与えている。
(薬の服用を中心に)
このニュースを薬の服用を中心に考えたいと思う。薬(抗生物質)は医師の診察を受け、医師がその必要性を判断して処方するものである。また、処方された薬(抗生物質)について、最後まで飲み切るように医師から指示された経験がある。

3 自分の主張(価値判断)
(水質汚濁を中心に)
かつて日本で発生した公害病のような深刻な事態を避けなければならないと思う。そのため、日本は技術提供などを行うべきだと思う。
(環境問題をを中心に)
インドだけの問題と考えるのではなく、他の国も自国の問題として考えなければならない。そのため、各国が協力して問題解決のために動くべきだと思う。
(薬の服用を中心に)
患者は、薬(抗生物質)の服用を途中でやめてはならないと思う。最後まで服用し、体内の菌を完全に死滅させることで、耐性菌の発生を減らせると思う。

4 記事の貼り付け

図1 NIE ワークシートの例

でのシートベルト着用率の低さについて発表した生徒は、「車に乗る機会が多いので、後部座席でもシートベルトを着用する大切さが分かった。また、自分が免許を取って、人を車に乗せるとき、シートベルトを着用してもらうように言おうと思った。」と記している。年齢や障害に關係のないスポーツ「ボッチャ」について発表した生徒は、卒業後に介護福祉施設で働くことを前提に、「このニュースはお年寄りの方々の新たな生きがいとなり、地域との交流を通して、人と人とをつなぐスポーツであると思います。幅広い年齢層の方と関わられるし、(介護福祉施設での利用者向けの)レクの一つとして良いと思います。」と記している。マナー違反について発表した生徒は、「電車や駅でのマナー違反は、私たちにも日常的に關係があり、多くの人が電車や駅でのマナーの悪さを感じたことがあると思います。少しのマナー違反が重大な事故につながってしまう可能性があることも考えなければならないと思います。」と記している。

次に「価値判断」として、生徒は「事実把握」「関

連認識」を踏まえて、自分の主張を考えることができていた。例えば、スマホ依存について発表した生徒は、「現代では、一人一台電子機器を持っているのが当たり前になりつつある。正しく使えば、便利だが、使い方を間違えると多くの問題が発生してしまう。そのため、自分たちにも身近な問題と考え、規則やモラルを守って使用していく必要があると思う。」と記している。子育て支援について発表した生徒は、「自分が大人になったとき、一体どんな社会が当たり前になっているのか。(政府が)今のように『女性が輝く社会』を掲げ、本当に輝けるような政策が充実しているのか。それとも、全く違った政策が行われているのか。ということが気になりました。もし、子どもができたとき、今のような社会では不安を感じると思うので、これから良い政策ができ、(社会全体が)明るい方向へ進んでいけたら、もっと女性が輝けると思いました。」と記している。非正規雇用の問題について発表した生徒は、「非正規雇用の従業員も介護休暇制度の対象となるようにし、やむなく離職しても再就職で安定して働き続けら

れる支援が社会として必要だと思う。」と記している。

これらの「事実把握」「関連思考」「価値判断」の一連の学習成果の発表として「自己表現」を行った。「自己表現」としての生徒の発表の後で、授業者がその発表内容についての補足説明を行った。その上で、発表に対する質疑応答等を含め、クラス全体での意見交流を行うこととした。

意見交流の時間では、質疑応答だけでなく、発表を聞いて、自分自身はどう考えたか等の感想を言い合う様子が見られた。また、質問者と発表者の一対一の関係にとどまらず、周りの生徒も同様の感想を持ったというように頷く様子や関連する質問をする様子も見られた。発表の時間を持つことで、個々の学習が、クラス全体での学習へと昇華した様子が確認された。

4 実践の評価

実践前の新聞等のメディアへの関わり状況を把握するため、予備調査を実施した。また、NIE 実践前後の授業や世の中のニュース等への意識を把握するため、事前調査及び事後調査を実施した。

事後調査では、授業への意識 3 項目、ニュースへの意識 3 項目、NIE に関わる意識 4 項目の計 10 項目を準備した。項目を以下に列挙する。

(1) 授業への意識 3 項目

- 1) 「現代社会の勉強は好きである」
- 2) 「現代社会の勉強は大切だと思う」
- 3) 「現代社会の授業で学習したことは、将来、社会に出たとき何かの役に立つと思う」

(2) ニュースへの意識 3 項目

- 1) 「世の中のニュース・出来事に興味・関心がある」
- 2) 「世の中のニュース・出来事の意味をある程度理解している」
- 3) 「現代社会の授業で学習したことや世の中のニュース・出来事と自分自身の日常生活とは、関係があると思う」

(3) NIE に関わる意識 4 項目

- 1) 「新聞の発表の学習に楽しく取り組めた」
- 2) 「他の人の新聞の発表を聞くことは有意義であった」

3) 「世の中のニュース・出来事をもっと知りたいと思う」

4) 「社会に出たら、世の中のニュース・出来事に関する情報収集を積極的に行いたいと思う」

回答は自由記述の設問を除き、「1. あてはまらない」から「4. あてはまる」までの 4 件法とした。

Ⅲ 結果と考察

1 実践対象者の状況

実践対象者の状況を把握するために、予備調査における回答を集計した(表 1)。

ニュースへの考え方に強い影響を与えているメディアとして、1 番から 3 番までの順番をつけるように求めた設問では、テレビを 1 番にあげた生徒は 22 人と最も多かった。一方、新聞を 1 番にあげた生徒は 0 人であった。

また、テレビを 1 番から 3 番のいずれかにあげた生徒は 31 人全員となり、インターネットをあげた生徒も同数であった。一方、新聞を 1 番から 3 番のいずれかにあげた生徒は 27 人となった。

各種メディアを見る(読む)時間の回答を求めた設問では、テレビは最も長い生徒で 360 分、平均 105 分であった。新聞は最も長い生徒で 15 分、平均 2 分であった。

これらのことから、生徒は新聞をテレビやインターネットに次ぐ重要な情報源と捉えているにも関わらず、日常生活においては、ほとんど新聞を読んでいない実態が確認された。

表 1 ニュースへの考え方に強い影響を与えているメディア

人数	新聞	テレビ	ネット	他
1番とした人数	0	22	9	0
2番とした人数	6	8	17	0
3番とした人数	21	1	5	4
計	27	31	31	4

2 授業への意識の比較

実践前後における授業への意識を比較した(表 2)。その結果、事後調査における平均値は、「現代社会の授業で学習したことは、将来、社会に出たとき何かの役に立つと思う」(平均値: 3.55, SD: 0.51,

表2 実践前後における授業への意識の比較

項目		事前		事後	対応のある t 検定
現代社会の勉強は好きである	平均	2.39	<	2.68	t(30)=2.33 *
	SD	0.76		0.79	
現代社会の勉強は大切だと思う	平均	3.29		3.52	t(30)=2.04
	SD	0.59		0.51	
現代社会の授業で学習したことは、将来、社会に出たとき何かの役に立つと思う	平均	3.03	<	3.55	t(30)=5.04 **
	SD	0.71		0.51	

**p<.01 *p<.05

表3 実践前後におけるニュースへの意識の比較

項目		事前		事後	対応のある t 検定
世の中のニュース・出来事に興味・関心がある	平均	2.65	<	3.03	t(30)=3.23 **
	SD	0.76		0.75	
世の中のニュース・出来事の意味をある程度理解している	平均	2.26	<	2.90	t(30)=4.50 **
	SD	0.68		0.60	
現代社会の授業で学習したことや世の中のニュース・出来事と自分自身の日常生活とは、関係があると思う	平均	2.94	<	3.35	t(30)=3.76 **
	SD	0.57		0.55	

**p<.01

表4 実践後におけるNIEに関わる意識

項目	平均	SD
新聞の発表の学習に楽しく取り組めた	3.16	0.64
他の人の新聞の発表を聞くことは有意義であった	3.48	0.57
世の中のニュース・出来事をもっと知りたいと思う	3.16	0.58
社会に出たら、世の中のニュース・出来事に関する情報収集を積極的にやりたいと思う	3.03	0.55

n=31

表5 ニュースカテゴリー

項目	数	割合
社会や地域に関わるもの	12	38.7%
福祉に関わるもの	8	25.8%
医療や健康に関わるもの	7	22.6%
育児に関わるもの	2	6.5%
スポーツに関わるもの	2	6.5%

n=31

以下数値のみ記載)が最も高かった。

実践前後の平均値を比較した結果、「現代社会の勉強は好きである」と「現代社会の授業で学習したことは、将来、社会に出たとき何かの役に立つと思う」において、事前よりも事後の平均値が有意に高かった。

これらのことから、本実践により、公民科「現代社会」への好感度や有用感が促進されたことが示唆される。

3 ニュースへの意識の比較

実践前後におけるニュースへの意識を比較した(表3)。その結果、事後調査における平均値は、「現代社会の授業で学習したことや世の中のニュース・出来事と自分自身の日常生活とは、関係があると思う」(3.55, 0.55)が最も高かった。

実践前後の平均値を比較した結果、いずれの項目においても、事前よりも事後の平均値が有意に高か

った。

これらのことから、本実践により、世の中のニュース・出来事への関心度、理解度、関係認識性が促進されたことが示唆される。

4 NIEに関わる意識

実践後におけるNIEに関わる意識を集計した(表4)。その結果、いずれの項目の平均値も3.0を超える高い数値となった。最も平均値が高いものは、「他の人の新聞の発表を聞くことは有意義であった」(3.48, 0.57)であった

これらのことからNIEの取り組みに対して、生徒は肯定的な意見を持つとともに、世の中のニュース・出来事に対する知的好奇心や情報収集への積極性が促進されたことが示唆される。

5 ニュースカテゴリーの状況

NIE ワークシートを使って生徒が行った新聞発表

をニュースカテゴリー別に集計した（表5）。

その結果、スマートフォンに関するもの、マナーに関するもの、地域に関するもの等「社会や地域に関わるもの」（12人）が最も多かった。他には、介護や福祉の問題等「福祉に関わるもの」（8人）、先端医療やがんに関するもの等「医療や健康に関わるもの」（7人）、「育児に関わるもの」（2名）、「スポーツに関わるもの」（2名）となった。

これらのことから、「社会や地域に関わるもの」に分類されるニュースの幅は広いことを考慮すると、「福祉に関わるもの」や「医療に関わるもの」等の福祉科の生徒にとって関係の深いニュースの多いことが確認できる。

6 自由記述

本実践に対する自由記述を、「自分自身が新聞発表に取り組むことについて」、「他の人の新聞発表を聞くことについて」、「授業全体について」の各観点から整理した。

(1) 自分自身が新聞発表に取り組むことについて

自分自身が新聞発表に取り組むことについては、「普段、新聞を読むことはあっても、自分でまとめたりはしないので、いい機会になった。」、「新聞を読む機会もあまりなく、ニュース等も知らないことだらけだったが、発表を通して、知識が深まり、新聞を読むことの意欲も高まった。」、「世の中の出来事を知り、意見を発表することができて、良かったです。」等の自由記述が得られた。

このような感想が全体の35.5%（11人）から得られた。自分自身で新聞発表に取り組むことを肯定する意見が多く見られた。これらのことから、自分自身で新聞発表に取り組むことで、世の中の出来事を知ることができ、これから新聞を読みたいと考える生徒が多くいることが示された。

(2) 他の人の新聞発表を聞くことについて

他の人の新聞発表を聞くことについては、「新聞発表では、クラスの一人ひとりの視点が違って、様々なニュースを知ることができ、さらに、様々な意見を聞くことができて、とても良かったと感じています。」、「いろいろな人のニュースを聞いて、そんなニュースがあったんだと気になることが多かったです。」、「みんな様々なニュースを発表して

いて、自分の知らないことも多くあったので、すごく役に立ちました。」等の自由記述が得られた。

このような感想が全体の35.5%（11人）から得られた。他の人の新聞発表を聞くことは役立ったという意見が多く見られた。これらのことから、自分自身で新聞発表に取り組むことで、世の中の出来事を知ることができ、今後も新聞を読みたいと考える生徒が多くいることが示された。

(3) 授業全体について

授業全体については、「知らなかったことも知れて良かった。」、「ニュースでみるより、理解しやすかった。」、「毎回、生徒が発表したニュースの内容を先生がまとめてくれたので理解しやすかった。」等の自由記述が得られた。

このような感想が全体の29.0%（9人）から得られた。授業全体を良かったとする意見が多く見られた。これらのことから、NIEの学習を肯定的に捉えている生徒の多いことが示された。

IV まとめと今後の課題

以上、本研究では、公民科「現代社会」において、社会認識の深化を企図したNIEワークシートを作成し、その効果を実践的に検討した。その結果、本実践の条件内で以下の知見が得られた。

第一に、実践前後の調査結果の比較から、本実践により、公民科「現代社会」への好感度が高まり、有用感が促進されたことが示唆された。また、世の中のニュース・出来事への関心度、理解度、関係認識性が促進されたことも示唆され、このことは、「知識が深まった」や「理解しやすかった」という自由記述からも窺える。

第二に、実践後の調査結果から、新聞発表の学習、つまり、NIEの取り組みに対して、生徒は肯定的な意見を持ち、世の中のニュース・出来事に対する知的好奇心や情報収集への積極性が促進されたことが示唆された。このことは、「発表できて良かった」や「新聞を読む意欲が高まった」という自由記述からも窺える。

第三に、生徒の作成したNIEワークシートから、生徒は「事実把握」、「関連思考」、「価値判断」の各段階での学習により社会認識の深化が図られたことが示唆された。また、個々の学習が「自己表現」

の段階で、教室全体の学びへとつながり、協働的な学びが実現したことが推察される。

以上の結果から、NIE 実践により、生徒は、学習意欲の向上が見られるとともに、世の中で起こるニュース・出来事の重要性を認識できたといえる。

しかしながら、本研究で得られたこれらの知見は、あくまで本実践の限られた条件下で得られたものである。したがって、今後は、多くの生徒を対象とした実践を行い、その学習効果を検証することが必要である。本研究の追試を含め、この点については今後の課題とする。

参考文献

大町直也 (2001) 「社会認識を深めさせる社会科学学習指導方法の研究」佐賀県教育センター『研修報告書要約』

[http://www.saga-](http://www.saga-ed.jp/chouken/choukikenshuu_jigyuu/chouken_report/h13/pdf/03oomati.pdf)

[ed.jp/chouken/choukikenshuu_jigyuu/chouken_report/h13/pdf/03oomati.pdf](http://www.saga-ed.jp/chouken/choukikenshuu_jigyuu/chouken_report/h13/pdf/03oomati.pdf)

(最終アクセス 2020 年 1 月 1 日)

小原友行 (2011) 「デジタルメディア時代の新聞活用教育」日本教育法学会編『デジタルメディア時代の教育方法』図書文化社, p. 153

影山清四郎 (2007) 「NIE の今日的意義」日本社会科学教育学会『社会科学教育研究』101, pp. 38-48

鍛冶直紀 (2015) 「定時制高校における新聞利用の可能性:『現代社会』の授業実践から」日本 NIE 学会『日本 NIE 学会誌』(10), pp. 77-86

杉原大輔 (2011) 「高校公民科 NIE 授業における地理的要素の導入に関する実践的考察」全国地理歴史学会『地理教育研究』(9), pp. 23-31

中央教育審議会 (2016) 「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ(素案)のポイント 参考資料」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/08/02/1375316_2_1.pdf

(最終アクセス 2020 年 1 月 1 日)

中日新聞社 NIE 事務局 (2008) 『教育に生かそう 新聞学習カリキュラム 中学校編』中日新聞社

中嶋利春 (2009) 「NIE を通した社会認識形成」愛知教育大学社会科学教育学会『探究』(20), pp. 14-

中妻雅彦 (2014) 「社会認識」日本社会科学教育学会『新版 社会科学教育事典』株式会社ぎょうせい, pp. 12-13

野中博史 (2006) 「報道による意見形成効果: NIE への指針」『宮崎公立大学人文学部紀要』13(1), pp. 261-274

松井克行 (2011) 「高校公民科における合理的意思決定力を育成するために活用可能な新聞記事の条件—授業実践, 授業構想の分析を通して」日本 NIE 学会『日本 NIE 学会誌』(6), pp. 69-78

水谷哲郎 (2010) 「社会科 キー・コンピテンシーの概念を取り入れた社会科学学習: 国民の司法参加『最高裁判所裁判官を審査する』の授業実践」『滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要』52, pp. 28-45

文部科学省 (2010) 『高等学校学習指導要領解説公民科編』教育出版

山根治 (2015) 「情報読解力育成のための NIE: NIE 実践の基本」愛知教育大学社会科学教育学会『探究』(26), pp. 25-32